

20 Hukutana

September 2001
2001年 9月
ふくたーな

1. 141回セミナー開催内容
2. セミナーを受講して
3. ジャンボ
4. 研究報告；ヒョウタンプロジェクト
5. 追悼
6. 編集後記

日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターニュースレター

第141回学振セミナー メインテーマ；女性と社会

今回のセミナーでは、「女性と社会」をメインテーマにしながら女性の視点から、社会のさまざまな課題を浮き彫りにしようと、2人の演者に講演をしていただいた。

日時 2001年8月25日(土曜日)14時～16時
場所 日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター
参加者 54名

演者1 楠瀬佳子(京都精華大学教授)
演題 アフリカ文学からみた社会と歴史

演者は、南アフリカやケニアの女性文学を通して見えるアフリカ社会の状況、及びどのように女性の歴史を再構成するか、という大きなテーマのもと、具体的には、南アフリカ出身の女性作家ベッシー・ヘッドの生き方をとおして話を進めた。

ベッシーは、ボツワナのセロウエという異国の村で幼子を抱えて、知り合いもなく、言葉も通じない地で亡命者として生活をし、48歳という短い生涯を閉じた作家である。演者は、ベッシーの作品にある「私はごく普通の人間でありたい。私はどこの誰とも同じ人間なのであり、当惑し、うろたえ、絶望的になったりもするのです。」という文章に触発された。なぜ「ごく普通の人間でありたい」とこんなにもあたりまえのことを、こんなにもさりげなく語らなければならないのか、と思った。それは、演者のそれまでの非人間的な生き方を根底から問い直すものであった。

ベッシーの生き方は、ごくあたりまえの人間的な生活を獲得する戦いであった。アパルトヘイトによる差別的な政治構造、男性優位主義、女性の自立をばむ伝統的な農村社会の悪しき慣習、キリスト教の道徳観などに疑問を投げかけ、告発し、挑戦していった。そして、人間の生は自然条件や社会環境で

決定されるものの、同時にそれらの環境を変革するものも人間の精神力、意志力であることを主張した。悪しき慣習や既成の価値観に取り込まれておとしめられることが多いが、ベッシーは、それらに対抗しうるだけの堅固な精神的自立、権力構造に取り込まれない強靱な自我こそが、人間と社会関係のあり方の基本だと考えた。こうしたベッシーの考え方は、示唆にとみ、学ぶことが多いのではないかと指摘した。



講演する楠瀬佳子教授

Mĩĩma haikutani, lakini binadamu hukutana
山と山は出会わないが、人は出会うものだ (スワヒリ語のことわざ)
Mountains never meet, but human beings do - Swahili proverb

演者2 フィリゴナ アチョーラ(マッサージ師)

演題 ハンディキャップを乗り越えて

演者は、1996年から3年間、平塚盲学校で按摩マッサージ等を習得し、ケニア人で初めて日本の国家試験に合格した。セミナーでは、うどんを食べるのに時間がかかり、クラスメートがもうすでに教室の掃除を始めている間も、うどんを食べていたら怒られたこと、電車に乗って居眠りをし、下車するはずの駅を通過してしまい、見ず知らずの日本人に助けもらったこと、授業がわからず友人もなくホームシックにかけ、一度はケニアへ帰ると叫んだことなど、さまざまなエピソードを紹介した。

そして、盲目というハンディキャップがあっても、勇気と努力と熱意があれば、自分の夢がかない、自己実現が可能になり、自立した生活が出来ることを強調した。さらに、日本で取得した按摩マッサージの資格が、ケニアでも活かせるように、日本大使館のサポートによって可能になった経緯も述べ、話の後は、マッサージの実技も披露した。



按摩マッサージの実技風景

2. セミナーを受講して

セミナーの会場は、いつもは食卓机と応接机が置かれている小さな事務所の居間です。その机を全部出して、丸椅子に座った聴講者の方々は50数名でいっぱいでした。一人目の演者は、日本の大学でアフリカ文学を研究されている日本人の女性でした。二人目の演者は、日本の盲学校で指圧を学び、ナイロビに戻ってきてマッサージ師をされている盲目の女性です。日本で体験されたさまざまなことを英語と日本語の両方を上手に使って話されました。

聴講者はナイロビに住んでいれば出身国はどこからでも参加できるといった感じで集まっていました。私はこのセミナーに参加するのは初めてでした。まったく生まれも育ちも違う、二人の女性演者の講演を大勢の方が聞きにくるという光景を眺めながら、とても不思議な空間に自分が居ることを感じました。

(国際昆虫生理生態学センター・吉田尚生)

3. ジャンボ

福江美智子(大阪府立大学)

3年半ぶりのケニアでした。前回と同様、島根大学・澤田先生の調査のお手伝いという名目でやってきたわけでしたが、実際にはミレニウム・アンセスターが発見されたツゲンヒルズでのキャンプ生活を楽しませていただいたに過ぎません。キャンプ地は非常に快適で体調を崩すこともなく、美味しくケニア料理を味わうことができました。期間的には前回とほとんど変わらないくらいでしたが、得たものはより大きい気がします。このニュースレター「ふくたーな」は、山と山は出会わないが、人は出会うものだというスウィリ語のことわざからきているそうですが、本当にそのとおりだと思います。はじめてあった人、再び出会った人、さまざまな出会いがありました。どの出会いも私に刺激を与えてくれました。この出会いを大切にしたいと思います。そして、このことわざは逆も言えるので気をつけねば…「山と山は離れないが、人と人は…」

高橋真央(大阪大学)

目を閉じると、子ども達の白い歯をのぞかせた素敵な笑顔が浮かんできます。この笑顔に惹かれて、今年もまたアフリカの大地を踏みしめることになりました。私がフィールドワークとして滞在した小学校は、ナロック県の東部に位置するマサイの子ども達が通う総生徒数440名の規模の大きな学校でした。そこで、女子の落第の原因や女子教育の状況を教師、生徒たちにインタビューし、彼等の学校生活を見させていただくことが今回の調査の目的でした。アフリカの太陽に負けないくらいの生徒たちの明るさと元気さ。大地のように全てを包み込んでくれるような先生方の暖かいもてなし。毎晩見る数え切れない星々の数に、オラシティでの出会いを重ね合わせるような日々でした。大自然に囲まれた中で彼らが学校に求めることは、貧困からの脱出とより良い生活を手に入れる手段としてのものでした。彼等の屈託のない笑顔の裏には、貧困との格闘、近代社会への憧れといった問題を抱えているように感じられました。この現実はどう関わっていけばよいのか？ おおらかなオラシティの人々の優しさが、その問いかけに対するヒントを与えてくれているように思います。その答えを追い求めるべく、これからの論文作成に助んで参りたいと思います。今回のナロック滞在中は、オラシティの多くの先生方にお世話になり、無事に調査を終えることができました。本当に有り難うございました。

須磨珠樹(大阪大学)

初めてケニアに来ました。ナロックで、コミュニティの子供とその家庭を支援しているNGOについて調べるため、オラシティに計8泊9日の調査に行きました。そこでは、先生方への聞き取り調査と、支援を受けている家庭と受けていない家庭、両方のボマを訪ねる機会に恵まれました。ボマでは、両親と子供に教育についての考えを聞き、NGOが実際に家庭に対してどのような支援を行っているのか、それがどう役立っているのか、海外援助について垣間見ることができたと思います。ボマや小学校では、毎回あたたかいもてなしを受け、とても楽しんで過ごすことができました。まだまだ、マサイの人々や生活について分からないことが多く、もっと長く居たかった…という思いで一杯です。また、機会があればケニアを訪れたいと感じました。

4.研究報告

ヒョウタンプロジェクト

森元泰行 (国際植物遺伝資源研究所サハラ以南地域アフリカ事務所)

研究のテーマは「ケニアにおけるウリ科作物の生物的多様性に関する民族植物学的研究」です。古来から様々な社会・文化に密接に関わり、文化的多様性と品種多様性の深い相互依存関係が存在すると思われるアフリカ起源のヒョウタン (*Lagenaria* spp.)に焦点を絞り、品種の多様性の維持に深く関わる経験的農業知識や技術、文化的システムなどを調査、検討することを目的としています。

自然との共生の中で植物の遺伝的多様性を古来から受け継ぎ、民族活動の中で新たな品種を生み出し、利用、活用し、育むことによって、生活や将来をみだしていこうとする人々の思考的背景や深い植物とのつながりに注目し、学問的視点から提示していきたいと考えています。

栽培品種の多様性は、文化の多様性と深く結び付き、

これらを取り巻く自然環境に大きく依存していると考えられています。本研究で取り上げる事例研究が、今後の生物遺伝資源研究分野における生息域内保全活動や現地保全技術、参加型育種法の応用に役立つものと考えています。

2001年5月から2002年10月までは、ナイロビから東南へ200キロにあるKitui 県においてヒョウタンのプロジェクトを行っています。地域農村女性会が同県におけるヒョウタン種の多様性と種の保全に関わる伝統的知識の調査とその普及、および住民意識の向上と栽培方法の改良を目的に地域の社会生活に根づいた農業者主体の種の保全活動に取り組んでいます。

2001年8月10日、Kitui で開かれた第2回の Kenya Society of Ethno-ecology ワークショップにおいて活動を披露し、好評を博し地元新聞に取り上げられました。



(Source: Kenya Times 19th of August, 2001)

大臣、国立博物館館長のワークショップ参加(左下)、農村婦人会の伝統技術競争(中央)、地域に残る神社(右下)。

伝統技術競争の内容は、例えば次のようである。

1. ヒョウタンをサイザルでできたロープで結び、水を取りに行く競争。
2. 割れたヒョウタンを縫ったり、5分間にサイザルでいくつ穴を通す競争。
3. 乾燥したヒョウタンをナイフで2つに切る競争。
4. ヒョウタンの表面を火であぶったり、彫ったりする競争。

以上の競技で勝った人には、賞金(1位1800シリング、2位1200シリング)が贈られる。

5.追悼

2001年8月30日昼過ぎ、島根大学中山勝博先生がナチョラ（ナイロビより北へ約500km）での地質学調査を終えて、帰国のためナイロビに向かう途中、不慮の事故によりお亡くなりになりました。中山先生は、京都大学古人類学調査隊(代表；石田英実教授)の一員でした。

事故は、ナイバシャからナイロビへ向かってハイウェイを走行中、キナレ地区（ナイロビから約70km）で発生しました。タイヤの突然のバーストにより、運転手はハンドル操作ができなくなりました。それでもなんとか車を制御しようとしたそうですが、結局、車は対向車線を逸れて1.5m下の側道に突っ込み、一回転してしまいました。その際、転倒の衝撃でサンルーフが開き、後部座席に座られていた中山先生は不運にも車外に放り出されてしまったのです。すぐにキジャベの病院に運ばれたのですが、意識の戻らぬまま帰らぬ人となりました。

私は、今回初めて調査隊へ参加し、そこで中山先生にお会いしたのですが、先生はいつも笑顔でいろいろとご指導して下さいました。例えば、発掘サイトの地層を前に、中山先生から堆積物の区切りについて解説していただいたことがあります。その時、私は化石になった動物達に何が起きたのかをわかりやすく、熱意を持って読み解いていく中山先生の姿に学問に対する真摯な姿勢と熱意を感じました。研究者としての眼力もさることながら、教育者としての資質の高さにも圧倒されました。研究を離れても、ヒマラヤやオーストラリアといった外国の話

から宍道湖の珍味の話まで先生の話は尽きず、いつもお酒を飲みながらの楽しい時間を過ごさせていただきました。

特に先生は、食べ物には相応のこだわりをお持ちで「帰ったらあれを食べたい、これを食べたい」と、みんなでよく話をしました。先生はキャンプでは何でも召し上がっていましたが、ウガリはダメでほとんど手をつけませんでした。また、ベースキャンプから離れたスグタ盆地で泊り込みで地質調査をしていたときは、「主食がビスケットというのは辛いなあ」と漏らしておられたのも思い出されます。きっとご家族との美味しいお食事を心待ちにされていたのだと思うと、本当に残念でなりません。

中山先生に魅せられて大学院で堆積学を志す先生の愛弟子が、調査隊のメンバーである実吉君（現新潟大院）をはじめとして、数多く存在すると伺っています。先生の研究魂は、ご遺志を引き継ぐ彼らの中でずっと生きていくと思います。中山先生のご冥福を調査隊一同心よりお祈り申し上げます。

(京都大学・荻原直道)



故中山勝博先生

6.編集後記

4月に赴任してきた当初は、事務所の慣れない仕事に戸惑いましたが、前任者の巻島さん、秘書のクリスティーンに教えていただき、今では楽しんで事務所の管理・運営などができるようになりました。

8月に開催したセミナーも多くの人々に参加していただき、参考になったという感想をいただきました。しかし、痛ましい交通事故が発生し、中山先生が逝去なさいました。中山先生のご遺族の方々へ、謹んでお悔やみ申しあげます。事務所では、これを機に緊急事態に際して善処できるように、研究者の緊急連絡先を再点検し、また携帯電話を所持することに致しました。多くの研究者の方々が、心地よく研究ができるようにサポート体制を強化していきたいと思っております。

(遠藤保子)

ふくたーな第20号 日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターニュース

発行日 2001年9月28日

編集・発行者 遠藤保子 編集協力者 吉田尚生

発行所 日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター

本誌の掲載記事を転載する場合は、事前にセンターまでご連絡下さい。本誌の中で署名のある記事についてはそれぞれの主張・意見は執筆者個人のもので、日本学術振興会の見解を反映するものではありません

JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE,

RESEARCH STATION NAIROBI

P. O. Box 14958, NAIROBI

KENYA

PAR AVION
VIA AIR MAIL